

1976年10月発行 舞台監督協会機関誌No.3より

舞台監督むかしむかし 過去・現在・未来 大木 靖

昔のことですが(昭和25年頃)私達の頃は、現在でもそうかもしれませんが、演出家志望の者が、舞台監督の仕事に必要なせまられてやっていた。

それは、舞台監督の重要性を軽視していたのではなく、当時は、演劇人口も少なく、限られた人数で舞台を維持して行かなければならなかったからです。

出演者の多い芝居などは、大学の演劇研究会などから応援してもらい、舞台監督兼俳優などといった一人二役、三役もしなければ出来ない公演が度々ありました。

しかし、だからと云って、舞台監督の仕事を疎かにしていた訳ではありません。現在以上に誇りを持ち、責任ある仕事をしておりました。

当時、舞台監督の仕事もさることながら、地方公演の時など完備された劇場が数少なかった為に、上演可能な舞台を設営する仕事が大変な作業であったのです。

地方の学校の体育館や講堂などに舞台を設営する技術も、当時の舞台監督の資格の中に含まれているのでした。

舞台監督の仕事については、青山杉作先生に、随分教えていただきました。教えていただいたといっても、先生は、こうなさいと教えて下さったのではなく、先生ご自身が、身を持って教えて下さいました。

先生の演出で私が舞台監督の時でした。舞台装置が出来上がり開演の時間が近づくと、先生はかならず何処からともなく現れて、大道具、小道具と、俳優の演技スペースの距離を身を持って実証して歩くのです。

ドアがあり、演技者となってその開閉をする先生に、私が抜き忘れていたガチ止めを発見したのも先生でした。舞監のミスを未然に防いだ上に、先生は私に何もなかった如くふっと行ってしまうのです。

舞台監督として、この先生の行動には、本当に頭が下がりました。

現在は、演劇人口も増え劇場も沢山出来て、再び、舞台監督の重要性の再認識する時期が来ているのではないのでしょうか？

しかし、舞台監督としての仕事は演劇人の中にも認識されていないのが、現状ではないのでしょうか？

それをきちんとする為には、外国の様にユニオン化するのが一番良い方法なのですが、現在の日本の演劇界では、まず無理な話のようですね。

演劇界、内外には、舞台監督の重要性をアピールする事も必要ですが、対外的にも、そろそろ資格基準をきちんとした方が良くはないのでしょうか？勿論これは、舞台監督者協会のみならず、演出、照明、音響等の各協会の同一目的での協調が必要ですが、日本の演劇自体、そう云う時期に来ているのではないのでしょうか？

外国では、非常に資格審査が厳重できびしいものだ聞いて居ます。先日、コメディフランセーズが来日しましたが、この時の舞台監督は七十才の人でしたが、なかなかきびきびしたものでしたが、フランスでは養成所の先生として有名な方との事でした。彼の舞台監督としての誇りある姿勢は、厳重な審査を受けて持つ有資格者であると言う誇りとも云えると思います。

兎角、あたり前の事になりますが、舞台監督者自身の各々の自覚が一番大切ではないのでしょうか？そして、その上に立って、演出家、製作者、その他スタッフとの交流を密にする事が、周囲の環境を良化して行くことになるのだと思います。

舞台監督者協会の発展の為にも、協会員、己々が勉強し、周囲の諸問題に積極的に取組んで行く事こそ、未来につながる道だと思います。(国立劇場舞台技術部長)